



大正3年桜島噴火とその記録

生涯学習課 文化財係 ☎ 0986-76-8873

今

年は、大正3年（一九一四）の桜島噴火から110年の節目の年です。

大正3年1月12日午前10時5分、桜島が大噴火を起こしました。これは日本が20世紀に経験した最大規模の噴火でした。桜島南岳を挟む東西の山腹にいくつもの噴火口が形成され、約2立方キロメートルの溶岩流・軽石・火山灰が放出。桜島の5つの集落が消滅し、桜島と大隅半島も陸続きとなりました。この噴火の終息には1年数カ月を要し、市内各地で軽石や火山灰による甚大な被害をもたらしました。

く、家屋は絶えず動揺し、軽石灰と混合して、雨霰あめあられと降りだし、誠にもの凄い有様になった。一昼夜で、砂石灰が平地で15センチ以上、吹き込みの所は30センチ以上積もった」とあります。同じく恒吉の勝目政隆の『櫻島噴火記』にも、ほぼ同様の記録があり、凄まじい状況であったことが分かります。

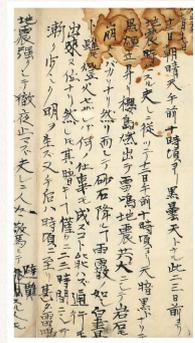
またこの噴火の記録を石碑として刻んだ事例もあります。大隅町の東坂元公民館には、同年4月3日に竹迫喜助が建立した噴火記念碑があります。ほかにも梶ヶ野公民館敷地内、末吉町仲町の個人宅にも噴火記念碑があります。

また桜島の被害に遭った地区はボラ土（軽石）に覆われ、農業に適さない土壌でした。そこで昭和30年代までに、「ボラ抜き」と呼ばれる除去事業が行われましたが、その記念碑が大隅北地区公民館敷地内に建っています。

活火山と共存する私たちですが、この機会に、改めて火山災害の歴史を振り返るとともに、防災についても考えてみませんか。



東坂元の桜島噴火記念碑



桜島噴火記

桜島は安永8年（一七七九）にも大規模噴火があり、記念碑が大隅町の笠祇神社敷地内にあります。ほかにも噴火に関する記念碑や記録などがありましたら、ぜひ情報をお寄せください。